

東大番頭小屋跡（衛戍監獄跡）

江戸時代（1603-1867）、大阪城は江戸（現在の東京）にいる将軍直属の大番と呼ばれる旗本で編成された12組の部隊によって守られていた。大阪城は12組の中の2組が1年交代で本丸の警護についていた。大番は城の南側外郭に大番小屋（兵舎）を構えていたが、東大番の大番頭の住宅はここにあった。彼の50人の精鋭武士とその家来200人は近くの小屋に住んでいた。1868年に勃発した戊辰戦争（1868-1869）で城が一時的に放棄され、周囲の城下町から略奪者が殺到し、大番小屋は焼失した。ここには軍事刑務所が1939年まであった。1931年に軍の兵士たちに共産主義文学を配った罪で軍法会議にかけられた川柳作家の鶴彬（1908-1938）は、この囚人の一人であった。彼は別の刑務所で服役中の1938年に赤痢で亡くなった。彼は俳句に似て遊び心があり、世を風刺する川柳に優れていた。彼の川柳の1つが刻まれた句碑が記念碑として近くに建てられた。

Akatsuki wo
idaite yami ni
wiru tsubomi

暁を
いだいて闇に
ゐる蕾